

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目	荻生徂徠の言語論についての再検討 —「文理論」から「徂徠点」まで—
氏 名	王侃良

## 論 文 内 容 の 要 旨

いままでの荻生徂徠の言語論についての研究によって、徂徠の考えは、単なる中国の母語教育を日本に導入し、それをもって日本の漢文学習法をとり代えるのではなく、唐通事と儒者たちが中国語へ投げかけた二極体制を調和・整合することによって、最後はわかりやすい日本語で中国の古代經典を直接に読めることを求めたことがわかっている。ただし、これらの研究は主に徂徠が訓読に対する考え方を述べることに集中しているが、徂徠が中国の文献からの影響、あるいは彼の語学資料が反映される徂徠の言語論に関するものはいまだに多くはないと思われる。

華音で漢文を直読する中国人でさえ、訓読で漢文を読む日本人と同じく、自らの音声言語の言語秩序・世界観に閉じ込められている。徂徠はそのことに気づいた上で、逆に、日本語をもって「其の異なる所の者を知る」ことが可能であると考えていた。この徂徠の考え方から、徂徠が中国語とその言語体系をどう認識しているのか、また彼はどのように日本語で説明しているのか、そしてこの認識が後にどのように日本語に影響を与えているのかといった問いをたてることが、本研究における問題意識である。

第一章では徂徠の訓点資料について、先行研究を踏まえながら、文献学的考察を行った。その結果として、徂徠の「言語論」、特に漢文学習方法論を論じている漢文典について本研究では、主に示蒙（「文理三昧」を含む）と初編という二つの資料を中心として展開した。

徂徠の「言語論」、特に訓読観を直観的に反映される訓点資料について本研究では、『南齊書』『梁書』『六論衍義』『射学正宗』『射学正宗指迷集』という五つの訓点本を選定した。同じように徂徠の訓読観を窺える国字解について本研究では、『孫子国字解』と『射書類聚国字解』二書に限定した。先行研究で挙げられたほかの諸本では、徂徠のものであるかを判断できないこと、訓読という面から考察にあてる価値が薄いこと、原文の訓点者や、底本の所在が不明であることという

欠点があるため、本研究では調査範囲から除外することにした。要するに、語学資料として本研究では、『南齊書』『梁書』『六論衍義』『射学正宗』『射学正宗指迷集』、『孫子国字解』、『射書類聚国字解』という七点を用いて検討することとした。

第二章では『訳文筌蹄後編』の「文理三昧序」における徂徠の「文理論」と、「文理論」について荻生徂徠と陳元賛の継承関係を考察した。

徂徠の「文理論」は、間違えなく元賛の説に由来したものである。ただし、徂徠はそのまますべてを踏襲しているとは言えない。徂徠は元賛が言う「文理」を精密化し、「文理」は「上下之分」と解釈している。また、徂徠は元賛の「上下」「離合」「能所」という三つの「文理」用語から、「離合」「移易」「直読」「転倒」というみずからの「文理の研究法」を創った。このように、徂徠は元賛の説をよく理解した上で、よりわかりやすく、そしてより論理的、また詳しく元賛の説を発展させて用いていると考えた。

また、「文理論」の記述から、元賛と徂徠が両方、「目で見る」ことを強調していることがわかった。日中両国の言語における差異を深く認識した二人は、同様に日本人に正しい中国語の学習法を日本人伝えるために工夫を凝らしていたことが窺えた。元賛の影響を受けて得たものとして、訓読否定のほか、「看書論」の芽生えも、すでに徂徠が若い頃に書いた「文理三昧」にあったことが推測できると思われた。

第三章では先行研究を踏まえながら、荻生徂徠の助字研究と『助語辞』との関係について考察を行った。

第二章での考察を踏まえ、徂徠の中国語研究においては「字義」、「文理」という中国語に関する基本知識と、「句法」、「文勢」という立派な文章を書く技法の二つの段階があった。前者は「是非」、つまり「字義」、「文理」によって中国語として成立するか否かを判断する基準である。後者は「優劣」、つまり中国語の母語話者であっても、専門的な訓練を受けていない場合、「句法」、「文勢」を把握することができないというものである。そして示蒙に載せられている徂徠の助字は、こうした「字義」、「文理」レベルにおける基本的知識として知る必要があり、「句法」、「文勢」を把握する際にも注意しなければならない重要事項である。「軽重」、「死活」のような徂徠の中国語研究における概念が意味するところも、彼の早期の助字研究を分析したことによって明らかにした。

次に、示蒙と『助語辞』を比較した結果、「一つの助字を文中の位置によって対比すること」「近似する助字を意味によって対比すること」「近似する助字を文法的機能によって対比すること」「文言助字と俗語を対比すること」という四つの助字についての研究法から見ると、示蒙は『助語辞』と同じ構文になっていることが明らかになったが、『助語辞』の項目を参照して引用していることも推測できる。さらに、「軽重」、「死活」という概念についても示蒙では『助語辞』と同様に使用

していることが窺われた。これによって、荻生徂徠における早期の助字研究は『助語辞』から大きな影響を受けたと考える。そして、徂徠の説において中国語の入門レベルではなく、上達の段階という重要な箇所に助字が置かれているのは『助語辞』と同じように、字義解釈のみに着目しておらず、文章に文彩を生じさせるための助字の使い方、つまり「修辞」を中心としてその説を展開していたからであると思われる。李・王の「古文辞学」と出会う前に、『助語辞』からの影響をその一つの源として、「古文辞学」のような思考の基本的な構想は、すでに徂徠の頭に築かれていた。

第四章では訓点に関する徂徠の語学資料を取り上げ、徂徠「訳文の学」と「徂徠点」の関係を考察を行った。

「訳文の学」の形式は依然として漢文訓読の形（返り点や送り仮名はそのまま保持）となっており、ただし一部の右側に見られる送り仮名や振り仮名などが、伝統的な訓点語の訓み方ではなく、徂徠は「文理」における「字の用」に従い、当時の日常語をもって切り替えていた。しかし、このような「訳文の学」的な訳し方は、伝統的な和訓に馴染んでいる当時の日本人としては、理解できないものとされる恐れがあったため、「訳」、つまり日常語で漢文を解釈すること以外、ほぼ徂徠は放棄した。

そして、この「訳」というものは、初編で字書のように、漢字カナカナ混じり文で漢字を解説することのほか、「左ルビ」として「徂徠点」に多く見られることが確認できた。これも「徂徠点」の性格と言えよう。

第五章では、荻生徂徠の「徂徠点」、すなわち訓点と関連する徂徠の語学資料を取り上げ、『射書類聚国字解』『南斉書』『梁書』を中心として、すなわち漢字語の左側にある振りがな（左ルビ）をめぐって『射学正宗』や『六論衍義』と対照して考察を行った。

まず、形式を基準として本研究は『射書類聚国字解』における「左ルビ」を、一類（語）と、二類（語＋助詞＋語、或いは文）という二種類に分類した。そして、その左ルビの出現は、訓点を付ける漢文の部分に偏る傾向がある。次に、国字解と訓点を付ける漢文におけるこの二種類の左ルビの割合が逆になっていることがわかった。そのうち、訓点を付ける漢文の場合、左ルビは多く二類の形として使われている。国字解的なものに表出されるのは、「徂徠点」に関する語学資料、特に白話文体、技術類文体で書かれた漢文資料における左ルビの一つの特徴であると思われる。

百余りの用例がある『六論衍義』より、『南斉書』『梁書』における左ルビは少ない。その内、一字漢語の左ルビは、『六論衍義』にあるものと違い、「訓訳」のように訳を示すことや、訓読みを提示することのほか、音読みを示すために付けられることが注目される。

一方、二字漢語の場合は、音読みを示す用例がなく、「訓訳」のようになっている。ただし、『六論衍義』と違い、『南齊書』『梁書』の場合では、漢字語が俗語とされても、その漢字語に左ルビが振られていない、また無訓のことも見られる。

このような考察結果によって、古文辞学を提出したという時期以前、徂徠の言語観には、一方的に新注によったもののみならず、古注からの影響も存在したことがわかった。また、『南齊書』『梁書』にある「徂徠点」の左ルビは、ひたすらに俗語を左側で訳すのではなく、場合によって訓をつけない、あるいは漢籍の注釈を参照したりすることもある。徂徠が『南齊書』『梁書』において一部の漢語は俗語であると意識しても、すでに非俗語として受容された隋代以前の俗語はそのままにしている。『南齊書』『梁書』における「左訓」の使い方も、徂徠が『六論衍義』において自身の中国語の俗語の知識に任せたりして訳すという「訓訳」と異なっている。つまり、『南齊書』『梁書』における左ルビは、「訓訳」と同一視することはできないと思われた。

以上の五章における考察から、徂徠の「言語論」に関して明らかにしたことは以下のようにまとめられる。示蒙や後編の「文理三昧序」が述べる「訳文の学」（早期の徂徠の言語研究）において徂徠は、中国語（漢文）の勉強を、字・句のレベルという入門の段階と、章・文のレベルという上達の段階に分けている。このような思考の基盤は初編の時期までに続けており、徂徠は入門の学習者のために華音直読と漢文訓読という二つの方法を勧めた。それに対して、上達の学習者のために「古文辞学」という方法を創ったと同時に、中国語学習の究極的な方法として「看書論」を打ち出した。

その内、「訳文の学」における「訳語」に和訓を取り換えることは断念した。しかし、わかりやすい当時の日常語をもって漢文を読解することを、徂徠はまだ実施していた。その実践の結果の一つが初編のような日常語で解説する中国語辞書の刊行である。もう一つは「徂徠点」において多用されている「左ルビ」である。